
真昼の月

江川なつる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真昼の月

【Nコード】

N7760M

【作者名】

江川なつる

【あらすじ】

ある夏の日。

少女はお気に入りの場所で昼寝をする。

目が覚めたとき、新しい出会いが待っていた。

夏の匂いは少しだけ切なくて。

それはきつと重なる想いが多いから。

序章（前書き）

オリジナルを書き始めて、まだ日が浅いですが頑張ります。
どうしても趣味で女の子が多くなってしまいました。
女の子しか基本出てこない話ですがよろしくお願いします。

序章

白い月が浮ぶ。

目が眩むほど青い空に、まるい月が。

昼と夜とが一緒になったような光景に少し変な感じがした。

がちやんと音がして私は乱暴に自転車を止めた。

雲ひとつない空は真っ青すぎて、浮ぶ月を妙に目立たせた。

暑い。

汗が何もしていなくても流れていく。

生い茂る木々のおかげで薄暗いこの場所でさえこの有様なのだから、ここまでの道中を歩いてきていたら私は干からびていたかもしれない。

そんなことを割りとは本気で考えていた。

友人からの誘いは断った。こんな田舎だ。行く場所など決まっている。

毎日、顔を出しているに近い場所をブラブラするのはそれなりに楽しい。小さい頃からずっと住んできた町だし、住んでいる人も見慣れた顔ばかりだ。

楽しいことは楽しい。でも飽きる。同じ仲間とつるむのも楽じゃない。

何となく伸ばしていた髪の毛が汗で張り付く。

鬱陶しくて制服の襟から入り込んだ僅かに茶色い地毛を外に出す。この髪の毛は基本的に気に入っている。量も多いし、巻くにしても結うにしても適当にするだけである程度形になってくれるから

だ。

逆に学校では教師に目を付けられるし、面倒くさい先輩が睨んできたりもするが切る事はしなかった。

負けた気がして悔しいからだ。

だがそんな風にして守ったわりに夏の暑い日は邪魔でしようがなく思える。

「うん……」

はあと結構大きなため息が出た。

夏の暑さを助長するような蝉の声が周囲から際限なく響いていた。暫く来ていなかったから伸び放題の草を蹴って踏んでと繰り返しながら進む。

目当ての場所は遠くないが急ぐような用事でも無いので適当に道を外れてみたりしてみる。途中で虫が飛んできたり、姿が見えないのがさがさと草を掻き分け逃げる音がした。

ザアッ

風が、吹きぬけた。

舞う草達に少しだけ目を細める。

視界が一瞬で開け草の緑に、空の蒼、雲の白、そして太陽の光がそこには溢れていた。

小さく息を吸う。強い風につんと夏の匂いがした。

「ここに来るの、久しぶりかも」

私の目当ては何も変わらず、そこに佇んでいた。

何てことはない樹だ。種類なんて知らない上に知る気も起きない。ただ私が小さい頃からこの樹はここにあって、一人になりたいと

きには使わせてもらっているだけなのだ。秘密基地なんて高校生にもなって言ったら笑われるかもしれない。

それでも感覚的にはそれが一番近かった。

「さあて」

ぱんぱんと私は掌を軽く叩いた。

格好は制服のままだが気にするほどでも無い。

普通に履いていたとしても中が見える可能性のあるスカートの下には既に“見せパン”という対策が施されている。

ましてや、この周りには人がいないのだから見る人も居ないだろう。

見たら殴るけどね。

そんなことを心の中で呟きつつ、一番下の枝に手をかける。ぐつと力を込めれば直ぐに慣れた動作で体が動いた。

「ふー、良きかな、良きかな」

お気に入りのポジションまで上って枝に腰掛ける。

太い枝は私が一人乗った程度ではびくともしなかった。

しっかりと持ってきてきていた布を木の枝に敷く。素肌で木の上に座ったり寝たりすると幹のでこぼした所などにひっかけてしまったりいつの間にか擦り傷ができていたりするのだ。

特にこの季節は制服も半袖になって触れる場所も多くなる。目立たない所ならばまだいいが見えやすい所に傷が着くのは女子高生として遠慮したかった。

少しわざと揺れるように体重を移動させてみる。それでも枝はほとんど揺れない。

何となく嬉しくなつて、私は口の端を緩めた。

ま、昼寝もするし。当然か。

この安定感があるから寝ることもできる。

寝相には自信があるし、何よりここは風の通り道らしく涼しい。

落ちた所で怪我をするような高さでもない上、下は草のおかげでフカフカだ。

それに人間体勢が崩れそうになると起きるものである。授業中に舟を漕いでいても完璧に机に伏せそうになると目が覚める。

結局はそういうものだ。

取り留めの無いことを考えながら私は目を瞑った。

何となく見上げた空には丸い昼の月が浮んでいる。

重なる枝葉の間から青い空と白い月が見え隠れする
綺麗な光景
だった。

肌を滑る風に目を細める。今日もいい風がこの場所には吹いていた。

(1)

トサ

これは私が草の上に落ちた音。

別に体重が軽いことを自慢しているわけではない。

むしろ身長があるせいでクラスの中ではきつと重い方に振り分けられる。

そんな私が“トサ”なんて軽い音で済んだのは、木の下に生える夏草の生命力が強靱だったおかげに他ならない。

埋もれたような上体のせいで目前に揺れる草の薄緑に私はありがとうと小さく呟いた。

「あ、あのっ、大丈夫ですか？」

「んー？」

そんな風に現実逃避をしても仕方ない。

私はまさか本当に落ちるとは思わなかった枝を見上げながら浸っていた私の耳に少し離れた場所から声が聞こえてきた。

身体の何処も痛くはないし、寝起きで起き上がるのが面倒だった。それだけの理由で草の上に寝転んだままだったのだけれど人がいるなら起きなければならぬ。どうやら心配してくれているようだし、と私は身体を起こした。

丈の高い草は座っている私の肩くらいまでは余裕で高さがある。時々撥るように肌に触れてくすぐりたい。

「大丈夫だけど」

痛みが無いから平気だとは思いつつ自分の身体を見渡す。

所々に千切れた草が着いてしまって、制服から払うのが面倒くさそうだった。それ以外は特に目立った外傷は無い。夏草は良く切れるから切り傷の一つや二つは覚悟していたのだがそれも私の杞憂だったようだ。

「木の上から落ちたんですよっ、大丈夫なわけ……」

「あるのよね、これが」

のんびりと立ち上がって草を払う。

私が手を動かすたびに落ちていく緑は見ていて少し面白かった。ざざざと重いものを掻き分ける音を出しながら声の主が近づいてくる。

そこ道じゃないから、通りにくいのに。

随分大変な道を選ぶ人だと思うけど、心配そうな表情に言葉を呑む。

そっちの方が通りやすいなんて心配で頭が一杯の人間に言った所で聞いてくれないだろう。大体にしてもう距離も然程無くなってしまっていた。

ここによく来る人でなければ草の濃い薄いなんて分からないのだ。私くらいしか来る人はいないし、つまり道なんて言っているのも私だけということだ。

「心配してくれてありがとう」

近づいた人影にできるだけ笑顔を心がける。

友達から素の時の表情が無に近すぎて取っ付きにくいなんて忠告を受けたこともある。

それからはなるべく人と接する時は笑顔を、というか感情を顔に出すようにしている。これが中々面倒くさくて、時々私がここに息抜きに来る理由の一つかもしれない。

「いえ、あの……本当に大丈夫ですか？」

「うん。気にしないで」

心配そうにこちらを見てくる。

そんな顔されても、困るんだけど。

私としては怪我も無いしちょっと失敗したくらいの気持ちなのだ。きつとこれからも時々はこの場所に来て、落ちた木によじ登って昼寝するのだから。

風がまた吹いてむき出しの足を草がちくちくと刺激する。

寝ている時は余り感じなかったが元々こちら辺の草は先端が尖っていて少し痛い。

立ったことで丁度良く草の高さとスカートから出ている足の部分が当たるようになったらしい。

「あなたはどうしたの？こんな所で」

パツと見た姿は制服だった。

見たことがある。というよりこの街に二つしかない中学校の制服だ。

私に通っていた学校とは違うから必然的にもう一つの中学校のものになる。

そして中学生という事は年下という事も流れで決定される。

長い黒髪は私とは対照的な清楚さでもいうものを醸し出していて、草の合間から見た第一印象はそのままお嬢様だった。見知らず

の人を心配するあたり性格的にも擦れていない素直で真っ直ぐな粉のだろう。

初対面の人に何をあれこれ考えているのか自分でも良く分からなかった。

言わせて貰えばそういうものを一瞬で思えるほどの容姿を彼女はしていたということだ。

「わたしは」

「ん？」

トーンの下がった声に私より下にある顔を覗き込む。

真っ直ぐな髪はサラサラとしていて風に僅かに揺れる。その度に長い睫に縁取りされた瞳が隠されて彼女の表情を分かり辛くなってしまう。

何処からどこまでも私と対照的な雰囲気を持つ子だった。

ぼろり

擬音にすればそんな感じ。

私は彼女の瞳から涙が生成されて丸い珠となり白い頬を滑り落ちるのを見ていた。

びっくりはしていた。それはもう、言葉に表せないくらいに。

きつと今の私の表情を俯瞰カメラで取って友人達に見せれば「あんなに驚けるんだね！」と逆に驚いてもらえるくらいには驚いていた。

だってこれは完璧に私が泣かせた、ということになる。

今この場所に居るのは私と彼女だけで、彼女が泣いたのは私が話しかけた瞬間で、その二つの事実だけ証拠には充分だろう。

「と、とりあえず、座る？」

珍しく噛んでしまった。私の動揺具合をよく表している。

私が寝ていた枝に敷いていた布を取ろうと上を見るもそこには何もなく、ただ太い木の枝が悠々と若葉を伸ばしているだけだった。

あれ、と首を傾げるもない物は仕方ない。

きつと木から落ちたときに一緒に落ちたのだろう。だからといって足元が見え辛いくらい茫々の草むらを探す時間は無い。

少しでも落ち着くように布の上に座らせてあげたかったのだ。

ちなみに私は普段から気にせず地面に座る。だが見るからにお嬢様である彼女がそれをするかは全く別の話である。しかしここは諦めて座ってもらうしかないだろう。

「はい」

蚊の鳴くような声で彼女は答えた。

返事が来たことにとりあえずほっとした私は気休め代わりに地面を掃いて促した。

しずしずと頷き綺麗に足を畳んで座る隣に私も腰を下ろす。やっぱり草がちくちくと刺さった。

(2)

「へえ、莉子のお父さんは転勤族なんだ？」

とりあえず泣き止んでもらった彼女に私はできるだけ優しい声で話を続ける。

気分的には子守だ。聞いた所、莉子の年は三つ下だった。弟と同年という事もあってか、何となく放っておけなかった。

手渡しはハンカチはまだ彼女の手の中に収まっている。

よれよれのそれはポケットに入れっぱなしになっていた。恐らく、いつだか母親に無理やりに近い形で持たされた奴でお嬢様っぽい莉子が持つととても違和感があった。

こういう子はきっと毎日きちんと糊付けされたハンカチを持って学校に行くのだろう。私の勝手な想像だけどその姿はとても似合っている気がした。

「はい。今日もまた転勤が決まったって」

「この街を離れるのね」

「ここにはお父さんの実家があるから、もう転勤しないのかと思つてんですけど」

焦つてもいなくて、泣いてもいない莉子の声はとても落ち着いていた。

少なくとも私の友達にはこういう喋り方が出来る子はいない。とても聞きやすく滑り込んでくる話し方はまるで訓練してきた台本を話しているみたいだった。

私が受けた感想としては放送部の子が教科書を読んでいるときに

近い。

聞き取りやすく、抑揚があつて、上手くて、そして眠くなる。

「転勤するって聞いて悲しくなつた、と」

「……そうです。すみません、いきなり失礼な姿をお見せしまして」

頭を深く下げる彼女に少しだけおかしくなる。

転勤が悲しくて泣くことが失礼なら、木の上で寝ていながら落ちて心配を掛けた自分の方が余程失礼な気がした。比べるのが間違っている。

転勤が悲しいのはその場所が好きだからだ。

それには少しも失礼なことなど含まれていないと私は思う。

「いや、別にいいのよ」

手を振って否定する。どうにも莉子は素直すぎる。

今まで付き合つたことの無い人種に私は少しだけどうしたら良いか分からなくなつた。

彼女の顔を見ればまだ僅かであるが泣いたことが分かる。目は赤くなつていたし、瞼も少しだけ腫れぼつたい。とりあえず莉子の手からハンカチを取つて涙の後だけ拭う。

少しだけ驚いた顔をされて私はとりあえず微笑んでおいた。

「どっか、行こうか」

「え？」

ぽかんと口を開けて固まる。何を言われたか理解していない顔だつた。

予想通りの反応に私は胸の中に風が差し込んだように気分が良くなつた。

とりあえず彼女に事情を理解させようと余り回転が良いとは言えない頭を働かせる。言葉を選ぶというのは難しい作業だ。自分の言いたいことをきちんと伝えられたかなんて確認もできない上に伝わった所で後から変わってしまうことも多い。

気心の知れた友人ならいざ知らず、初対面の年下相手に使うべき言葉を私は知らなかった。

悲しいことに後輩に慕われる性質たちでもないので学校での経験値もゼロに等しい。

「夏休み中に転勤しちゃうんでしょ？」

「はい」

風に木がざわめく。同時に夏草もそよいで素肌を刺激した。

そういえば、と下げた視界に自分とは比べ物にならないきちんとした丈のスカートが見える。

さっきから感じていたのだが莉子はどうにもお嬢様という形容詞の上に真面目なという文字がつくようである。

「なら、その前に思い出作らなきゃ」

「え、ええ？」

「ほら。こっち」

まだ戸惑った顔をしている彼女の手を握って引く張る。

ここに来るのが初めてだった彼女とは違い、私は通いなれている。歩きやすい道を選んで自転車の元に戻るなど朝飯前だった。

木の所に行った時間の半分ちよつとだろうか。

それくらいの時間で私はきちんとした道へと戻ってきていた。

「あれ？」

戻ってきたもののそこは何もなかった。

相変わらず舗装される気配も無い砂利道に、この頃の暑さですっかり干上がった水溜りの底がひび割れていて物悲しい。踏んだ所で泥の感覚もなく砂埃が舞うのは分かっていたので自転車でも、たまの歩きでも避けることにしていた。

そこまで細々と見てみたところでなくなったものが見つかるわけでもない。むしろこの殺風景な場所で自転車という大きなものが見つからない時点で無いのだ。

分かりきっていた現実に納得した所で、隣を歩いていた莉子が不思議そうな顔で私を見る。

「どうしました？」

どうもこうも自転車が無い。　だがそんな事私以外知るわけが無いので黙っておく。

そう大したことではないものの隠すほどのことにも思えなくて素直に口に出した。

「自転車がなくて、ね」

「大変じゃないですかっ」

「こんな所に鍵掛けしないで置いておいたのが悪いもの」

人も通らない場所だから油断していた。

だが街中でこれをすれば鍵も掛けずに放って置いた方にも責任はあることになる。

慌てた様子で周囲を見回す莉子を見ながら髪の毛を弄る。長いそれは指の先でくるくると回っている。どうしようかと少しだけ考えて、脳裏に描いていたルートを改竄する。

自転車については気にしない。

明日は幸い休みの日だし、その間に買うなり借りるなりの手段を

講じることにする。

今至急なのは私の自転車とこれからの登校についてではなくて、莉子をどうやって遊ばせるかというそれだけなのだ。

「ゲーセンは無理か……まあ、近所だしいいけど」

定番は諦めなければならぬが思い出が作れないわけでもない。全然知らない場所だったら困ってしまうかもしれないが幸いなことに熟知している。

ゲームセンターやカラオケがある市街地に徒歩で行く気にはなれなかった。自転車も一台しかなかったがそれはそれ、二人乗り（二ケツ）という便利な手段がある。

莉子を見たところ軽そうだし問題ないはずだ。いかに体力に自信の無い私でも。

「そうなんですか？」

「そつ。昔ながらの街並みって奴ならここら辺の方がいいわよ」

莉子のまあるい瞳に説明する。

田んぼに畑、神社に無駄に広い空き地。更には駄菓子屋なんてものも存在している。レトロな気分を満喫するにはある意味持つて来いの場所である。

喫茶店も一応なりともあるし時間を潰そうと思えば出来なく無いのだ。ただこの周辺に済む子供は高校生にもなると飽きるほどそれらを周っているので行動範囲が広がってからは足が向かなくなる。それだけだ。

「それじゃ、行きましようか？」

大体の予定を決める。

相変わらず刺さるほどの夏の日差しが肌に痛い。歩くと考えただけでくらりと視界が揺れ、早めの熱射病にでもかかってしまったようだった。

隣を見る。

まだ涙の後はわかるけれど、私よりは余程スッキリした表情の莉子がいる。中学生はまだ元気に溢れているんだろうかと三つ下だった彼女の顔を見ながら考えて、暗い考えになってしまいそうだったから打ち切る。

高校生はまだ若い。まだ若い。と頭の中で繰り返す。

友人から老け顔なんて言われた記憶は何処か遠い彼方に捨ててきた。

「はい」

莉子がにこりと微笑む。

その顔はやはり自分にはない若さが輝いていて、私は少しだけ氣落ちした。

(3)

暫く他愛も無い話をして乾いた道を歩いていた。

容赦なく照りつける日光に辟易しつつ時折莉子の様子を伺う。

確認してはいなかったが莉子は歩いてあの場所まで来ていたらしい。

“ 街を離れる前に少しでも多くのことを知りたかった。 ”

なんてことを言っていたがそれにしてもある程度の広さがあるこの街を徒歩で回ろうとするとは私だったら思わない。凄いと同時に少し呆れる。

「おばちゃん、お金ここに置いておくからね」

「はいはい」

駄菓子屋さんの店内に入る。ひんやりとした独特の匂いが鼻腔をくすぐった。

莉子は駄菓子屋さんに来たことがなかったのかキョロキョロと周囲を見回している。

私は昔から良く食べていた駄菓子を見つけると迷わずそれを取ってお菓子や細々としたおもちゃ、くじに埋もれるように置かれている台へとお金を出した。

奥からお客の気配を感じておばちゃんが出てくる。

ちやりん

小銭が触れ合って金属の冷たい音が響く。

蝉の聲がうるさいくらい溢れていた道を歩いてきた分その静かな音はよく耳に残った。

この店のおばさんも昔からの顔なじみだ。私が小さい頃から少しも変わっていないように見える顔はそれでも白髪が増えただろうか。

実際に来るのは何時振りだろうと記憶を振り返ったりしてみたが遠すぎてハッキリしない。

「久しぶりだねえ。あたしゃ、中学生になったばかりだと思ってたよ」

ちろりとこちらを見たおばちゃんがあった。

この街に中学は二つしかない上、高校に至っては一つしかない。

だからこの周囲の子供しか見ないおばちゃんでも制服で何処の学校かなんて容易に判断で来てしまう。中学と高校の区別なんてもっと簡単だろう、と思う。

時々隣の市の高校の制服を着ている人もいるが余り制服を覚えるのが得意で無い私でさえ小さい頃から三種類の制服を見て来たせいでもう見て直ぐに判断できる。

長年子供を見てきたおばちゃんにはもっと簡単はずだ。

「いやだ、おばさん。私はもう高校生よ」

「そうみたいだね。いやー、時が過ぎるのは早いよ」

あつはははと豪快に笑うおばさんを見て、愛想よく答える。

中学生の制服はもうとつと卒業した。まだ物忘れが酷くなる年とも思えないが、この頃の暑さを考えれば近所の子供の年くらい忘れる事もあるだろう。

莉子はまだ見慣れないお菓子たちにきよろきよと視線を動かしている。

友達かい？というおばさんの言葉に頷いて暫くその動きじつと見てみる。小動物のように端から端をすばしっこく動いていて、見ていて飽きない。

「そんなに珍しい？」

「はい！」

そんなに力いっぱい頷かれてはそうとしか言えなくなってしまう。私にしてみればここにあるものは珍しく無い。いつも見てきたものだし、来ようと思えばいつでも来ることが出来る場所。そんな認識しかなかった。

だからふらりと立ち寄ったに近い場所で莉子がそこまで喜ぶとも思っていなかった。

「でも、ここだけじゃないんだから迷いすぎると時間がなくなるわよ」

「あ……そうですね」

からかい半分で言った言葉に彼女の表情が少し沈んだ。

失敗した。私は思わず顔を顰める。この街を離れるのが嫌だと泣いた少女に“時間がなくなる”は無神経だった。いつもなら常套文句である「また来よう」が使えるがそれでもできない。

できないからこそ彼女は泣いていたのだ。

知っていたくせに対応できない自分の迂闊さが嫌になる。こんなんだから友人にも鈍いとか何とか言われてしまっただろうなあと思い、彼女に分からない程度に苦笑した。

「じゃあ、お勧め教えてください」

そんな私に気付いたのか、気を遣ってくれたのか。それは分からない。

けれど莉子は顔を僅かに俯かせた私の顔を覗き込むようにして言った。その顔に浮ぶのは柔らかな微笑で先ほどの沈痛な面持ちは少しも見えなかった。

大人っぽい子。そして優しい子。私はそんな風に思った。

木の上から落ちるといふ迷惑すぎる初対面から今まで私は年下であるこの子に気を遣わせすぎだ。これではどっちが年上なのか分かったものじゃない。

莉子はいいい子だ。

優しい。気が回せる。この二つだけでも彼女は私ができない事をすんなりとこなしているといえる。理想的な性格というものを具現化したらこういう子が出てくるんじゃないだろうか　そんな風に考えながら同時に少し心配になる。

「莉子は……」

「はい？」

出そうになつた言葉を連れ戻す。

疲れない？

そんな事を言うのはきつと彼女に対して失礼だ。
空気読まない、読みにくいと嫌な定評がある私だがそれくらいは分かる。

可愛らしく首を傾げる彼女の顔を見て「ううん、何でもない」と誤魔化す。生ぬるい風が開きつぱなしの扉から吹き莉子の髪を揺らす。外を元気に走っていく子供たちの声が聞こえた。

「お勧めはね」

何をすればいいのかわからなくなった私はとりあえず見慣れた棚たちを見回す。幸いな事に駄菓子屋にあるものは足繁く通っていた頃と余り変わっていない。

駄菓子の種類はそれほど増えることが無いのか、それとも人気のあるものが結局昔からあるものなのか。私には分からなかったし、別にどちらでも構わなかった。

でもこの時は代わり映えのしないラインナップに助かったと思っ

ただ。

駄菓子屋さんを出て道を歩く。

相変わらずの暑さだったが一番暑い時間帯は越えたようだった。少しだけ太陽の光が優しくなったような気がした。それでも流れる汗の鬱陶しさは同じで時折拭わなければならなかった。

「楽しめた？」

「はい！駄菓子屋さんって色んなものがあるんですね」

「まあ、“何でこんなのが”っていうのも置いてるわね」

実際あの店には様々なものが置いてある。

駄菓子は勿論良く分からないアクセサリーやら子供が好きそうな玩具もあるのだ。アクセサリーの中には時々良いものもあって街に出る前はここで買ったりしたものだ。

今日だって中々センスのいい指輪があってこっそり莉子には内緒でこっそり買ってしまった。財布の中身は限りなく薄くなったが彼女の思い出作りに貢献できたと思えば良いだろう。この数時間の付き合いであるが彼女の人の良さは充分に実感できた。こんな良い子の為にこそお金は使われるべきである。少なくとも参考書よりは親に対する言い訳を考えつつ歩いていたら隣からくーと可愛い音が聞こえてきた。反射に近い動きで音の聞こえてきた方向、つまり莉子のほうを見る。

彼女の白い肌が赤くなっていた。色が白い分、その差は顕著で私は少しだけ笑ってしまう。

「一回休憩しましょうか？」

丁度良く次は喫茶店に行こうかと思っていた。店の並びを考えるとなんか一番効率よく町を回ることが出来るからだった。とはいってもそこを周ったら最早見せるものなどほとんど無い。

本屋さんなどはあるが態々見せるほどのものとは思えなかった。

「お願いします」

顔を紅くしながら頷く。俯かされた頭は身長の関係もあって可愛らしい旋毛が見えた。

風が吹く。私の髪も莉子の髪も強いそれにはためいて、視界が塞がれてしまう。

一瞬のつむじ風。

風が凪いでそつと瞳を開ける。すると夏の空に昼寝する前に見た白い真昼の月が浮かんでいて、私は何だか不思議な気持ちになった。

(4)

扉を開けるとちりんちりと軽やかな音がした。

「ここに外れはないから好きなのを頼んで良いわ」

窓際からメニューを取り莉子に渡す。

何回も着ている私は見るまでもなく、今売り出しているものをテーブルの上に置かれている別メニューから読み取る。相変わらず甘いものに力を入れている店だった。

季節にあった甘味　カキ氷などはもちろん　定番のパフェから、お汁粉、果てはパイにアイスと女の子が喜びそうなものが列挙されている。そしてそのどれもが美味しいのを私は良く知っていた。調整された冷房が寒くも暑くも無い気温を保っている。高校の近くにある喫茶店やファミレスは冷房が効きすぎて寒くなってしまいがここならそんな事も無い。そういう細かい気配りなども含めて私はここが気に入っていて今でも度々訪れる理由であった。

「そうなんですか。でも、どれも美味しそうです」

笑顔で大きく頷く彼女。その姿に暗さは無い。

顔の前でメニューを広げあっちこっちに視線を動かす様は見えて楽しかった。

しばらくその様子を観察しているとちらちらと私の方を見る。最初その動作が何を表しているか分からなかった私は何度目かに目が合った時、思わず首を傾げてしまった。

すると莉子は少しだけ照れたように頬を赤くしてから、一人で見ていたメニューを私にも見えるように差し出す。それから小さな声

で「一杯ありすぎて、決められません」と言った。

「ごによごによと籠る声は私が放送部の朗読のようと思った口調とはかけ離れていた。でもそれが中学生という年相応に感じられて私は小さく噴出す。」

薄い紅色が耳まで広がり真っ赤になった。

それが更に可愛くて私は口元が緩んでいくのを感じた。

一頻り莉子の表情を堪能した後、私は拗ねてしまったらしい彼女にごめんねと軽く謝りつつメニューの片方を支える。広がる名前はデザインに違いがあれど、予想していた通り私が記憶していたものと大差ない。

「そうね……甘いのは好き？」

甘いものが嫌いな女の子は少ない。莉子を見るからに甘いものが好きそうに見える。

そんなことを思いながらも一応の確認に彼女の顔を見る。かく言う私は甘いものは好きでカフェというより喫茶店の雰囲気を持つこの店にも何回か来ている。

「大好きです！」

「なら、これとか良いんじゃないかしら」

思っていた通りの返事だった。私は相槌を打つように頷いてから一つの名前を指差す。

私が時折無性に食べたくなるものだった。

莉子も気に入るかは分からないがそれでも彼女に食べて欲しいと思う。自分の好きなものを人が気に入ってくれるのはとても嬉しい事だから。

「これが好きなんですか？」

私の指先の文字と私の顔を莉子の視線が往復する。

じっと見つめる顔は真剣そのもので、きつとこういう人のことを直向きな性格と呼ぶのだろうなと思わせる。しかしお菓子選びにそこまで真剣な表情が出来てしまうあたりが彼女らしい。たかが数時間、という人もいるだろうが私は莉子のどういう行動が“彼女らしい”のか何となく分かる程度には彼女の事を知ったつもりでいた。

「そうね。私のお気に入りの一つってところ」
「それにします」

ニコリと微笑んだ私に彼女はほぼ即答した。
きつと文字なんて見ていないし、それが何かも分かっていない。
いいのかしら？

疑問が過ぎりもしたが莉子と目が合った瞬間にそんなことは飛んでしまっていた。

彼女の瞳がとても、とても強くて真っ直ぐなものだったから。そこに含まれる真剣さに私は一瞬気圧されてしまったのだ。

“私のお気に入り” 彼女がこの言葉で即決した事は想像に難くない。

莉子は顔に出やすい。良くも悪くも分かっていたことだった。
だからこの時表情に出た感情もきつと本物だったのだろう。

分かっていた。分かっていたからこそ、私はそれを受け止めきれずに気付かない振りをするしかなかったのだ。

「……じゃあ、マスター」

いつものように注文をする。莉子の手からメニューを受け取り、通いなれた私が両方を頼んだ。じつとその様子を見る視線を感じて頬に熱が昇ってきそうだった。

注文してマスターの後姿を見送ってから場を誤魔化すために携帯電話を探す。こういう相手の顔を見られない時にあの文明の利器は大活躍だ。

いつも無造作に突っ込んでいるポケット　　ない。

時折折り込む鞆の横　　ない。

滅多に入れない場所も探す。流石にここまでないと焦りも出てくる。最悪の可能性として自転車の籠に入れていたかもしれないけれど最早自転車自体がないのだ。

つまりは失くしたということになってしまふ。

「どうしました？」

私が鞆やらポケットやらをひっくり返す勢いで探し始めたのだから、対面に座る莉子も当然様子の変化に気づく。顔を見づらいなど最早考えていらなかった。

本末転倒もいいところだが事情が事情だ。仕方ないだろう。

携帯電話には色々な情報が詰まっている。そんなことは女子高校生の間では常識過ぎて誰も口にしない話題だ。命の次、下手すると同じくらい大切と言う子も少なく無い。流石にそこまで大切とも思わないがあの箱には大切な情報やら要らない情報やらを矢鱈滅多ら入れている。

生きていけないと大泣きする話でもないがもう一度全ての情報を習得することを考えると面倒くささ大きなため息を何度も生む事になってしまふ。

「ケータイがない、みたい」

何だか前にもしたようなやり取りだとデジャヴを感じながら私は言った。

注文したものが何も届いて無い状態で言うべきことではなかった

かもしれない。

それでもこちらを真っ直ぐに伺う視線に嘘はつけなくて、その上心配の表情が惜しげもなく表れていては誰もが陥落するというものだ。

「け、けーたいですか？」

「うん」

「あの、携帯電話ですよね？」

「そうね」

莉子の視線がテーブル、窓の外、壁、天井と動く。それからもう一度私の元へ戻ってきて片方の指の先からもう一方の方へと本当に一周する。

ここまで人に見られるという経験は中々ない。

それこそモデルでもしている人だったら日常なのかもしれないが、生憎普通の人生を歩いてきた田舎の高校生にそんな経験をしている人物はかなり稀といえよう。

莉子は都会に行けば読者モデルとかなれそうだけど。

観察を仕返すように莉子の身体を見てみると、幼いながら綺麗な顔立ちをしている。

今はまだ可愛いに近い容姿だが高校生になるくらい 私と同年になる三年後くらいには美人さんという言葉が似合う人物になっているだろう。彼女の持つお嬢様な雰囲気もそれに拍車をかけていて、同い年だったら声をかけるのを躊躇ったかもしれない。

なんてつらつらと考えていたがそろそろ時間切れのようだ。

目の前で莉子の口が何回か開閉する。音はない。ただ私に何かを伝えようと動くだけだ。

その動きが何度か続いた後、やっと声が追いついてきた。

「探しにいかないんですかっ」

「探しに行くわよ？」

私の言葉に莉子は直ぐに腰を上げた。今にでも飛び出していきそうな雰囲気だ。

「何してるのよ」

「え、何って探しに……」

それを間一髪、莉子の腕を掴む事で押し留める。

私だつて探しに行きたい気持ちは当然ある。自分自身の持ち物だし、責任から言っても私が探すのが筋だろう。大体この子は私の携帯電話を見たことも無いはずだ。見たことがない物を探せるとすれば超能力者に他ならない。

私はふうと小さく息を吐いた。

「お腹が空いてちゃ見つかるものも見つかからないわけ」

暑い中をここまで来たのだ。そして探す道程は今までの道のりを帰ることになるから同じ距離、下手したらそれ以上に歩く事になる。お腹が減っている女の子にその道のりは過酷だ。落とした本人である私でさえ嫌なのだから関係の無い彼女を伴って探すというのは罪悪感が募る。

よつて、今何も食べずにここを出るといふ選択肢はない。

気持ちとしては飛び出したいがそれは莉子にもマスターにも申し訳なさすぎる。

「ほら、座つて？」

莉子の視線と表情が動く。それを私は有無を言わせない笑顔で座らせた。

私のそう意識した笑顔は中々怖いらしい。笑顔が怖いってどれだ
けって思いもしたが時折役に立つので気にしない……しないことに
したい。

「あなたが、そう言うなら」

その効果が出たのか、はたまた莉子が素直だからなのか。

どちらかは分からないが莉子は椅子に座りなおしてくれた。丁度
良く、頼んでいたものが運ばれてくる。未だ不満そうな顔をしてい
る彼女を宥めながら私はそれに手を伸ばした。

*

(5)

「それで、どういうの何ですか？」

色とか形とか……と尋ねる莉子の言葉に私は頬に手を当てた。

言うべき特徴はさしてない。色は良くある白だし、形も一般的な折りたたみ式である。ストラップもよく失くすという理由で余りつけない上にデコレーションをしているわけでもない。

そういう変哲の無い携帯電話をどう説明すればいいのか少し困ってしまったのだ。

「E^エT^チY^ユUの、Pシリーズなんだけど」

「あー、可愛さ（pretty）を売りにしたシリーズですよね」
「そうそう」

機種としては然程珍しいものでもない。

むしろ何年か前まではほとんどの女子高生はこのシリーズを使っていた。それはやはり売りになっていく可愛さと同時にカメラやメールなどの女子高生が欲しがる機能が一番合っていたからだ。難しすぎず、操作しやすい。

そんな理由で数年前までは大流行していたのだが、他社のものやそれぞれ多極化するニーズに合わせて色々なシリーズが増えた今使用者は三分の一くらいに止まっている。

「そういえば莉子はケータイ何使ってるの？」

「私はt^タa^ビp^ピi^イoです」

私の言葉に莉子はポケットから一つの箱を取り出した。長方形の

それは言うまでもなく携帯電話で、黒の鈍い光沢が新品ではない事を示してる。

t a p i o も携帯電話の会社としては大手である。私の使うE T Y U とは市場を二分していると言っている。この頃は他にも色々なものがあるらしいのだが、そこまでそういう事情に詳しく無い私にとっては携帯電話の会社で出るのはこの二つの名前くらいだ。

「へー、それなんだ？」

「はい」

少し恥ずかしそうな表情はきつとその機種が揮いという事を自覚しているからだろう。私の曖昧な記憶では莉子の持つものは4年ほど前のものだ。一年に二回は新機種が出る現在そこまで古い方を持つ人物は少ない。少なくとも私は見たことがなかった。

「物持ちがいいのね」

「そう、ですか？」

「ええ」

莉子が不思議そうに首を傾げる。

この時もう少し詳しく話をしていたら、なんてそんな考えが後になって出てくるなんて私は少しも思っていなかった。

「ないねー」

「ないですね……」

「となるとやっぱり、あそこかあ」

莉子と出会った場所。夏草が生い茂って地面が見えなくなっているあの場所。

そこしか考えられなかった。

携帯電話が無いことに気付いた喫茶店から歩いてきた道を辿ってきたが何処にも携帯電話らしきものは無かった。もちろん駄菓子屋のおばちゃんにも落ちていなかったか聞いたし、念を入れて交番に届けられていないかまで聞きに行った。

しかし答えは見えていない、届けられていないの一点張りでありあえず一番落ちていそうな場所に私と莉子は足を伸ばしていた。考えてみれば私は木から落ちたんだし、その時地面に落ちていたとしても何の不思議も無いのだ。

「探すのは大変そうね」

「手伝いますから。頑張りましょう」

莉子の微笑みに私は力なく頷いた。

はつきり言ってまたあそこまで戻ってから移動するのは面倒くさい。

しかし自分の不注意が起こした事だと考えればまだ諦めもついた。とぼとぼと歩く私の隣で莉子は心配そうな、それでいて嬉しそうなという複雑な表情を浮かべながら足を進めていた。

「のんびり戻りましょう？」

「はい」

ふわふわと笑う莉子に私はゆっくり足を進めた。

急げと心は急かしてくるがまだ暑さの残る時間帯に走ったりできるほどの体力が残っていなかった。いや、体力というより気力である。

「ごめんね、こんな事に付き合わせて」

莉子に街を案内していたはずなのにいつの間にか落し物探しである。

あらためて考えてみると申し訳ない気持ちが競り上がってきて私は莉子に頭を下げた。

「いえ。わたしも楽しんでますから気にしないで下さい」

「そうなの？」

「はい」

莉子の顔に嘘は見られなかった。

相変わらず艶やかな黒髪は風に靡いていたし、汗をたくさんかいたはずなのにいい匂いが私の鼻腔を擽る。これがお嬢様との差なのだろうかと意味の無いことを考えて疲れを紛らわす。

つまり莉子は本当に心の底からこのハプニングを楽しんでいる
そんな感じがした。

「とりあえず行きますか」

「ええ」

私の目の前に手が差し出される。手を繋ぎましょってことなのはさすがに分かる。

ただどう反応したらよいかかわからなくて私は困ってしまったのだ。されたことがほとんど無い行為に返し方を知っている人間がいたら見てみたい。

余程間拔けな顔をしていたのだろうか。莉子は私の顔を見るとまた少し笑って、それから自然に私の手を取った。

「こっちですよね」

きゅつと手を握られる。それから莉子は道の先を指差した。
その感覚が少しだけ懐かしくて、口の端が緩んでしまった。だってこんな風に手を握られることなんて幼稚園以来とっていいくらいだと思う。

莉子の手って柔らかかいし温かい。
別に不思議なことじゃない。けれどそんな当たり前のことがとても嬉しかった。

少し恥ずかしい気もしたが繋がった手はそのままにして道を歩くことにする。

「そつえば、あの場所は家から近いんですか？」

ぶらぶらと足を進めていた。

そう言うとともに不真面目な印象を受けるかもしれないが自体に一番あっている言葉なのだから仕方がない。

のんびり、ゆっくり、お互いのペースで歩く。それは思っていたより心地よいことだった。

「私の？」

「はい」

莉子と出会った場所は通っている高校と家との中間に位置する。

そういう意味では近いのかもしれないが、学校が中々に遠い所なのでそのことの間と思うとそう言いたくなくなるのが正直な気持ちであつた。

「近いつて程じゃないけど、学校からの帰り道にあるから寄りやすいだけかな」

くいつと繋がっている感覚を確かめるかのように引っ張る。

少しだけ子供っぽいような気もしたが考えない。手を繋いでいる時点でいつもの私らしくないことは確定している。友人に見られたら失笑される事請け合いだ。

その点、莉子は大人らしい。私がしたことには気付かないはずがないのに何も無いような振りをしながらしつかりと反応してくれる。反応といっても手に込められる力が少々変わっているだけなので気のせいかもしれない。

「寄り道ですか？」

「時々だけだね」

そんな風にくすぐったいやり取りを繰り返しながら道を歩いていた。

あの場所に行くのは寄り道としか言いようが無い。

人との付き合いが面倒なときにちょっとだけ逃げ込む場所なのだ。その目的に雑木林であるあそこは適している。人は近寄らないし、ぱつと見て人がいることもわからない。

使い出してから今までの数年は見つかった事はない。

そう考えると莉子があの場所出会った初めての人物になる。樹から落ちて出会ったという、何とも間抜けな出会いであるがこうして一緒に動いたびに彼女が良い子であるのが分かる。柄にもなく偶然を生んでくれた神様に感謝しても良いくらいだった。

「へー……ってことはあそこに行けば会える可能性があるってことですね？」

可愛い事を聞いてくれる。

そんな風に思っても、別にあそこに行かなくたって私と会うことはいくらでもできる。特に今探している携帯電話さえ見つければ会う

ことが難しくたつて繋がっていられる。

寄り道する場所とはいっても私があの場合にいることは余り無いのだ。

「会えなくはないだろうけど、ケータイが見つかったらメアド交換するんだし。別にわざわざ来てくれなくても街とかで会えると思うけど」

「あ、そうですね。うつかりしました」

「そう」

恥ずかしそうに頭を掻く莉子に頷こうとして身体が固まった。

いきなり歩みを止めたことに莉子は不思議そうな顔で私を見上げる。どうしたんですか？と小首を傾げる姿は可愛らしかったのだが残念な事に今それに触れる余裕は皆無だった。

いたのだ、私が。

さっぱり、意味が不明だ。

見てしまった私にしても理解できない。

もしかしてこれが世の中に三人いるというそっくりさんなのかとも思ったがそんな言葉で簡単に形容できるレベルの似た方ではなかった。まさに瓜二つ。生き別れの双子の妹だといわれても私は素直に信じただろう。いや、むしろその可能性を信じたい。

「あ、れは妹さんですか？」

私の視線を辿って莉子もその姿を見つけたらしい。

一瞬びっくりとした顔をしてから私を見て、至極もつともな疑問を投げかけてきた。

「うつん。弟はいるけれど、妹もいるなんて聞いたことない」

「じゃあ……」

道路を挟んで向こう側の道を歩いている“私”は中学校の制服を着ていた。私が通っていた中学校と同じものだ。その時点で他人の空似なんて可能性はほとんどなくなってしまう。

同じ中学ということは学区が重なっている。

似たような地域に住んでいてこれだけ似ていたらあつという間に噂になるに決まっている。狭い街なのだ。少なくとも子供の顔が商店街の人に覚えられる程度には。

「莉子、そのtapiroのケータイ、いつから使ってるの？」

「えっと。そうですね、半年くらい前です。思い切って新しい機種に買い換えたんです」

思わず頭を抱えなくなった。

なんてことだ。

私にとつての四年前が莉子にとつての半年前なのだ。つまりここは私のいた時代から三年前くらいになる。通りで駄菓子屋のおばちゃんが中学校に入ったばかりなんていうわけだ。

おばちゃんの間違っていなかった。間違っていたのは私だったのだ。

(6)

*

「ど、どうしたんですか？」

莉子の慌てた言葉が聞こえる。

それでも私は足を止める気にはならなかった。いや、止める気にならなかったというより止まってしまったら二度と歩き出せないような感じがして怖かったのだ。

繋がった手はまだ離れていない。

駆け足に近い速さで動いているせいで段々と汗をかいているのは分かっているが柔らかな感触が伝わるその手を離せなくなってしまうっていた。

「ケータイはもういいわ」

考えてみれば莉子と出会ってから携帯電話を弄った事はなかった。元からそこまでの機械を弄っている性質でもなく、友人と連絡を取りたい気分でもなかったからだ。人付き合いが面倒くさいときに携帯電話という機械は果てしなく邪魔なものになる。

「え？なんですか？」

「たぶん、この世界にはないから」

何も分かってないぽかんとした表情と疑問が半々の顔を見て苦く笑う。

この場所で見つからない事はほとんど確定してしまった。もしか

したら普通に落としているのかもしれないけれど、それはそれ。今更探す気にはならない。今向かっている樹の下に落ちていたらそれ以上の事はないのだけれど、きつとそんな都合のよいことはないだろう。

携帯電話を見つけて三年後に帰れるというなら必死に探しもする。でもそんな確証はないし、何となく関係ない気がしている。つまり勘。今必死に樹の下に向かっていているのだって、ただ何となくなのだ。

「どういつ……」

訝しげな顔で莉子が私を見る。

私はたぶん優しく微笑みかけて彼女の疑問をわざと流した。

上手く説明する自信はなかった。それに言いたくもなかった。ただ自分の身に起きた事を信じたくない上、莉子に疑われたら私の気分は奈落まで落ちてしまっただろう。

「私、帰らないといけないみたいで」

「……っ」

小さな、本当に小さな声にならない音が漏れた気がした。

こんな短い間であっても少しは私のことを気に入ってくれたという事だろうか。

そうだとしたらとても嬉しい。私は莉子のことをかなり気に入っているからだ。

「そう、なんですか」

耳の側を風が通り抜ける。その合間に莉子の声が聞こえた。夏らしい生温い暑さを持った風にそれでも汗が伝う身体には幾分涼

しく感じる。

「うん」

莉子の声に私はただ頷いた。

それ以外にどういう態度を取っていいのかわからなかったからだ。

それからしばらく沈黙が続いた。

私は何も話す気になれなかったし莉子も突然変わった私の様子に何を口に出していいのか判断できなかったに違いない。気まずい沈黙に申し訳なくなる。

木の下に着いて、私はまず自分が落ちたところに近寄った。

「私が落ちたのってここよね？」

「はい。ここで間違いないと思います」

一応莉子にも尋ねる。どうにも私は寝起きの悪いタイプなので起きた直後の事はあやふやなのだ。それにしても今回のことはよく覚えているなと自分で思い、木から落ちるなんて衝撃的な起き方をすればそれも当然かと逆に自分を納得させた。

じつと夏草が曲がっているところを観察してみる。

綺麗な円とは言いがたい楕円が広がっていた。よく見てみると、木の根やら出っ張った石やらが草の緑に見え隠れしていてこれが当たったならば痛かったに違いない。

幸いな事に草の層は厚く、その心配はなかったが覚醒直後から痛い目に合わなくて良かったと私は胸を撫で下ろした。

「ね、私が落ちてきたの見てたの？」

ふと疑問に思う。

夏草は膝丈を余裕で越えて下手すると腰くらいまではある。私が寝そべればそのまますっぱりと身体が覆われてしまう。普通に寝ていたとしたら恐らく気づかれることはない。

だが莉子は私が落ちてきてすぐに近寄ってきた。寝転がったままぼんやりと空を眺めていた私の耳にするりと飛び込んできた。

それだけで莉子は私が落ちるところを見ていたのだろう、と何となく思ってしまう。

「ええ、見てました。だからびつくりしたんです」

その時の事を思い出したのかくすりと莉子は笑う。綺麗に笑う子だなと今更に思った。莉子の笑顔は小さい花がほころんだ様で見ていて安心する、というか心が穏やかになるのだ。

ふわふわ笑う姿に少しだけ心が落ち着く気がした。

「どういうこと？」

びつくりはすると思う。私だって道を歩いていて木から落ちてくる所を見たらとても驚く。

だけど莉子の反応は驚いただけというわけではなさそうだった。驚いただけならばあんなに綺麗に微笑んだりはしないだろう。少なくとも私はしない。気になって私はくすくす笑いの残滓が未だに残る莉子に首を傾げてみせた。

「だって、すごく綺麗に落ちてたんですよ？」

「きれいに？」

綺麗と落下が繋がらない。思いついたのは水泳の種目である飛び

込みだった。

だが自分がそんな競技的な意味で綺麗な格好で落ちているわけもなく、私は莉子の言う綺麗という表現を捉え損なっていた。

余程不思議そうな顔をしていたのだろうか。私の表情を見て莉子はまたくすくすと笑い、繋がっていた手に僅かに力を込められる。きゅっと引つ張られる感覚に逆らわずにいると莉子の顔が直ぐ側に來て覗き込まれるような格好になった。

目の前に広がる顔は綺麗で。

綺麗という言葉は私の落ち方に使われるようなものではなくて、きつとこういう姿に使われるべきである。そう思っているのに、私が使われるべきと感じた本人は何の銜いもない様子だった。

「まるでパツと出てきてそのまま落下したみたいに、穏やかな寝顔のままだったんです」

その言葉に何とも言えない気分になった。

褒めているつもりなのは分かっている、ただ私は自分のことを信じられるほど自愛ができるタイプではない。莉子の言うように寝たままだったことを考えてみると随分間抜けな顔をしていたのではないだろうかと心配になってしまう。

寝起きに自信が持てる女の子などそうそういない。

テレビに出ているアイドルだって朝に突撃を受ければ必死に顔を隠すし、寝起きが悪い人間にしてみれば頭がはつきりしていない時間の間に人と会うこと自体が気を遣うのである。

「……褒められてる気がしない」

だから私は素直に感想を口にした。

少し唇を尖らせて見せたのは、いわゆるポーズという奴だ。本当はそこまで拗ねてもいなければ気にしてもいないが莉子を見ている

と構いたくなってしまうて、こういう余計な行動もとってしまうのだ。

「褒めてますよ！」

「ほんと？」

少し慌てる姿はいかにも年下という事を表している気がした。

莉子は真面目で思っていることが直ぐに顔に出してしまう情緒豊かな女の子である。自分の三年前を思い出してみると、どうにも恥ずかしくなってきたしまつて考えたくない。

私の三年前ね。

とりあえず、莉子のように良い子ではなかった。それは間違いない。

思春期真っ只中というやつだ。振り返るにはまだ早い。

私は自分をそう納得させてから、莉子の様子を伺う。まだ落ち着きを取り戻すには時間が足りなかったらしい。そわそわしているのが身体全体から見えた。

思っていた通りの反応に私は機嫌よく頬を緩ませて、莉子の名前を呼んだ。

「莉子？」

「はい」

素直に返事をする子。本当に素直で真っ直ぐな綺麗な子。

夏の青い空にその姿はとても映えていて、在りもしない眩しさに目を細める。まるで光に祝福されているかのように見えた。

「私ね、たぶん、三年後くらいに帰ってくると思うのよ」

口が渴いていた。暑さのせいなのか、緊張のせいなのか、はたまた

た全然関係のないことなのか。私には分からない。

「どこかに行かれるんですか？」

「んー……まあ、ちよつと遠くね」

自分の口から出た言葉に呆れる。嘘も方便とはこういう時に使う言葉なのだろう。この間の国語の授業での先生の声が頭の片隅にでも残っていたようだ。

三年後に帰ってくる、というか、三年後に戻るのだ。戻った先で出会ったとしても私は今のこの姿のままだけど、莉子は三年経って自分と同じ年になっている。その時の莉子の反応を考えたくない。姿が変わらないなんて何の冗談かと思うだろうし、結果として私が私だと信じてもらえないかもしれない。

どちらにしろ、私は莉子を傷つけることになる。そして私が傷つく可能性も大だ。寂しさに任せて言葉を発するのは、この場で良い事とは到底言えない。

莉子が寂しそうな顔をこちらに向ける。先ほどもまでの明るい表情が雲に隠れてしまったように、霞む。

いやだ。

そんな顔を見るのは嫌だ、なんて思う。途轍もなく自分勝手な感情だ。

今から私と莉子は間違いなく遠くになる。距離も、時間も、全てが一回リセットされてしまうようなものだ。それでも彼女は許してくれるだろうか。私は許されるだろうか。

「そう、なんですか」

「うん」

悲しそうな声に私は頷くしかできなかった。ここで”ごめん”と謝るのは何か違う気がした。

少しの間、重たい空気が流れる。それは翳ることのない暑さと相俟ってとても居心地を悪くさせた。

「でも……また会えますよね？」

莉子の黒髪が風に舞った。同時に吹かれた草たちが上昇気流に巻き込まれて昇っていく。

私はその一瞬の風の強さに反射的に目を閉じた。そして再び開いた時、飛び込んできたのは丸くて白い月だった。とくん、と小さく鼓動が弾んだ。

「え、ええ。きっと、会えるはずよ」

余りにはつきりと目に映ったそれに一瞬気が逸れていた。だが目の前にいる彼女は勿論、そんな事を気にしてなどいなくて、私は少々焦りつつ答えた。

すると莉子は小さくにこりと笑った。安堵の微笑みに私には見えた。

「それならいいんです。わたしもこの町を離れますから、約束しましょう？」

「三年は長いわよ」

少しだけ困ってしまう。叶えられるか分からない約束をすんなりできるほど私は大人ではなかった。莉子は私の言葉を気にせず、きっぱりとした口調で言い放つ。

「関係ないですし、気は長いほうです」
「全く、変なところで強気なのね」

くすりと今度は私が微笑む。この町を離れたくなくて泣いていたのに、三年は待てるというのだから不思議な話だ。けれど離れるのが嫌で泣けるのは気持ち強いからだ。そう考えると三年待つと決めてしまったら、三年待てる強さを莉子は持っているのかもしれない。つまり一言で表せば芯が強いのだ。

じつとこつちを見る莉子へと小指を差し出す。

少し子供っぽいような気もしたが今のわたし達には、この方法が丁度良い。ほんの数時間過ごしただけで三年後の約束を取り決めてしまうような”子供”なのだから。

「指きりね」

「嘘吐いたら針千本です」

軽口に軽口が返ってくる。わかっている。莉子は本気だ。この約束を何してでも守るだろうことは目を見れば直ぐに分かった。三年後、彼女は高校生になっている。中学生の今より行動範囲は広がるだろうし自由も増えるはずだ。

本当に、しっかりした子ね。

それが少しだけ悲しい。だけどそれを口に出すのは間違っている。

「あっ」

小指を絡ませたまま、笑い合っているわたし達。まるで時が止まったかのような感覚。その時間を動かし始めたのは莉子の何でもいい一言だった。

キラキラ輝く視線が私の頭上を越えて樹へと延びている。

「どうかした？」

私も振り返って首を上へと反らせる。だがそこに広がるのは青々

とした葉っぱと吸い込まれそうなほど青い空だけだった。何の変哲も無い風景である。

「あそこ、今光りました！」

莉子の指はまっすぐに木の上を、それも中々に高い枝を指していた。この樹には良く登る私でも、あの高さまでは登った事はない。

「ケータイかもしれません」

「え、でも、私が寝ていたのはあそこより低い枝よ？」

「鳥がくわえて引っ掛けたのかも。とりあえず、見てみましょう」

莉子はそう言う「よいしょ」とスカートの裾をまくり出したので、私は慌てて止める。どうも、私と離れることが決まってから彼女は行動的過ぎる。

「私が登るから。莉子はそこで見ていて」

彼女の肩に手を置いて落ち着かせる。僅かに不満そうな瞳が私を見上げたが見ない振りをすることにした。この樹には何回も登っている。初めて登る莉子よりは幾分か安全だろう。それに傷一つない白い肌を傷つけるのは私が嫌だった。

いつものように最初の出っ張りに手をかけ、ぐつと力を込めれば私の身体は直ぐに最初の枝へと届いた。そこからいつもの枝、大体樹の中間の高さまでは時間を掛けずに着くことができた。まるでサルのように身軽に枝を登る私の姿は莉子には素晴らしく運動神経の良い人に見えたらしく、下から羨望の眼差しが投げかけられているのは見なくても分かった。

「さてと」

ここからが勝負だ、と私はまだ頭上にある枝へと視線を向ける。

下から見た時は分からなかったが確かに光を反射しているものがあるようだ。あれを見つけれられるのだから莉子はきっと凄く視力が良いのだろう。

届くかしら？

いつも昼寝をさせて貰っている枝からまた登る。ある程度の高さになると枝自体が細くなり、私の体重をさせることは無理そうだ。

問題の枝はもう直ぐそこまで迫っていた。後、一段か二段登れば間違いなく手が届く。

そして見るからに私の体重を支えられなさそうな枝が目の前にはあった。距離としては微妙な所である。目の前の細めの枝を握って、上半身だけを伸ばせば何とか光まで届くだろうか。

全体重を掛ければその瞬間にポキリと折れる事は明白だった。そうなる何処まで力を入れて腕を伸ばせるかだ。

「無理しないで下さいねっ」

下からは心配そうな声が聞こえていた。真上から見る莉子の姿は小さく見えて、最初木の枝の上から彼女を見つけていればこう見えたのかもしれないと思わせた。

「大丈夫。もう少しだから」

ぐっと手を伸ばす。指先が触れるまで数センチだ。

もう少し、と枝を握る手に力を入れて上半身を持ち上げる。あまり使われることの無い筋肉が軋んだ。これは明日筋肉痛になるわねと口の中でばやく。

限界まで伸ばしたその指先に硬質なものが触れた。それと同時に枝に乗っていたものがバランスを崩し転がり落ちる。私は反射的にその落下地点へと手を伸ばし、落ちてくるものを受け止めた。

「とつと、危ない、危ない」

パシンと乾いた音とともに掌が叩かれる。零さないように握ったそれは間違いなく私の携帯電話で諦めていたものが戻ってきた嬉しさに顔が綻ぶ。これで莉子と連絡先を交わすことができる。こんな場所にあつたのは烏でも運んだのだろう。

そんな風に気を緩めたのが良くなかった。

脱力した身体は重くなる。寝ている人間が普通に背負うよりも重いのもそのせいらしい。

そして今、私は二本の枝に分散させていた体重を足元の一本だけに向け、その上、手に舞い戻ってきた携帯電話に頬を緩めていた。つまり弱っていた足元の枝が折れるには充分な体重が一気に掛かったことになる。

バキンッ。

聞こえた音は思っていたより軽かった。

「え？」

「危ない！」

間抜けな私の声と、切羽詰った莉子の声。

その両方が私の耳に入り枝が折れたことを理解する。急変化する視界が妙にゆっくりに移っていった。まず目に鮮やかな緑と枝のくすんだ茶色、それから最早支えるものの無い足元を見れば折れた枝の影に莉子の姿がはつきりと見えた。

そつだ、莉子は私の真下にいた。このままでは彼女まで枝にぶつかってしまう。

咄嗟に頭に浮んだのは自分の心配ではなくて莉子の心配だった。

私は一度この樹から落ちているから、それほどの大怪我になるとは考え辛かったのだ。

「莉子っ」

ぐんぐんと地面との距離が、莉子との距離が近づく。それでも体感時間は長かった。たかが数メートルの落下にしては、随分と長く、数秒はあった気がする。

莉子はその細い腕を広げた。私を受け止めようとしてくれているのは歴然だったが、この場合には褒められた事ではない。私のことなど構わずに逃げてくれて方が良かった。しかしそれを心優しい彼女に求める事が誤りだったのだ。

段々と莉子と私の距離が近くなり　ぶつかった。

終章

聞こえたのは「トサツ」という思ったより軽い音だった。人にぶつかった筈なのに、いや、あの場所から落ちたにしては衝撃がなさ過ぎる。

私は恐る恐る閉じていた瞳を開け状況を確認した。

広がる夏草の緑に変わりはない。そして誰かを下敷きになっている感覚も無かった。

「……莉子？」

地面についていた手を動かす。片手には硬質な、それでいて馴染んだ携帯電話の感触、もう片方には生命力に溢れた夏草の感触あの柔らかくて温かいものは何処にもなかった。

辺りを見回してみても、まるで何もなかったかのようにただ蝉の鳴き声だけが響いていた。

もどつて、きた？

ぱっと上を見上げる。そこには確かに私が掛けた毛布が風に靡いていた。じわりと今更ながら落下の恐怖による汗が滲み背筋を冷やした。だけどそれより怖かった、悲しかったのは莉子がいなかった。だった。

唐突に三年前にいた私は、唐突に三年後に戻ってきたのだ。

折角、ケータイが戻ってきてきて莉子と連絡先を交換できるはずだったのに。どうやら、余程空気の読めないものによる仕業らしい。ぶつぶつと文句を言いつつ立ち上がる。草を払い、用済みになったケータイをポケットの中に突っ込んだ。

イラついて握ったせいで、くしゃくしゃになってしまった髪を優しく吹く風が宥めるように撫でていった。相変わらず空に浮ぶ月は

飄々としていて、私はまるで仇のように睨んでしまう。

莉子に、会いたい。もう一度だけ会って、わたし達を始めたい。
叶わぬ夢に背中を丸めて幹に寄りかかる。三年の月日があるうと、
この樹は何も変わっていない。

「間が悪すぎるわ、全く」

ぼつりと呟いた一言は暑さの中に溶けて、私は一人を知る　　は
ずだった。

「そうでもありませんよ？」

「え」

涼やかな声が耳朶を打った。少し大人びた”それ”はつい先ほど
まで聞いていたものに違いなかった。私は信じられない気持ちを
抑えて声のした方へと振り向く。心臓が人生で初めてというほどの
速さで動いて落ち着かなかった。

「これ、忘れ物です」

手渡されたのは私の鞆。氣に登る時に邪魔だからと幹の側に置いて
いたものだ。

伸ばされた手から鞆を受け取り、そのまま身体、顔と視線を動か
す。たどり着いた先にあったのは見慣れたものとは少し違う、それ
でも見たかった人のものに違いなかった。

受け取った鞆がそのまま地面に落ちる　　この時の私の顔はとて
も間抜けなものだったに違いない。だって、目の前の莉子の顔がと
てもおかしそうに笑っているのだから。

「り、こ？」

信じられない気持ちで目の前の顔を見つめる。じっと見つめすぎて、下手したら穴が開く可能性があるくらい見つめていた。

そんな私の不躰な視線を莉子は少しも気にせず、ただ微笑んでいる。

「はい」

「え、なんで」

聞きたい事も言いたい事もたくさんあった。たくさんありすぎて、私の中で渋滞を起こしてしまっていた。きちんとした文章として言葉成すには僅かなりとも時間が必要だった。

莉子は不思議そうに首を傾げると、まるで今いることが普通だというように言った。

「何でって、約束したじゃないですか。指きり忘れちゃったんですか？」

「あ」

三年、経ったのだ。それはつまり約束の年月が過ぎ去った事を意味している。あの時、場所についての取り決めは無かったから莉子がこのに来ることに何ら不思議はなく、むしろ真面目な彼女の性格を考えると、きつちりと約束を守ることとは分かりきった事だろう。

ゆびきり、と小さく呟いた私に莉子はふわりと微笑んだ。

ついさっきまで一緒にいた彼女より大人びた表情で、綺麗に微笑んだ。

その顔が三年の月日をはっきりと感じさせた。

「三年、経ったのね」

自分に時の流れを認識させるように、事態を飲み込ませるために、私は自然と呟いていた。

「そうですよ」

まだ信じられない私に対して、莉子はとても普通に物事を受け止めているようだった。三年という月日を通り過ぎてきた莉子と刹那に三年前が詰め込まれた私。その二人の間に認識の違いが出るのは当たり前といえば当たり前かもしれない。

「急に消えて、ごめんね？」

「本当に驚きました。すぐく探したんですよ？」

莉子にどう見えたかまでは知らないけれど、とても唐突で急激な変化だったのは間違いないだろう。町を離れる彼女に、唐突に消えた人間というのはショクなことだったのではないだろうか。分からない。それでも申し訳ないとは思っていた。

顔を伏せ、謝る私の手にポケットの膨らみが触れた。あ、とそこに入っている存在を思い出す。これも別れる前に莉子に渡そうと思っていたのだが携帯電話のせいで忘れていたのだ。

「でも約束のおかげで会えました。知ってたんですね、三年後から来た事……ううん、あの時に気付いたってことですよね。だから、急に様子が変わって、あの場所に戻ったんでしょう？」

びっくりした。莉子の言う事は一つも間違っていないくて、まるで私の考えが読めていたかのようだった。頭の良さそうな子だなと最初に思ったのは間違っていなかった。

だけど。

そう、大体はあっている。でも肝心の部分を気付いていない。

「そうね。知ってたから約束した。それは間違ってたわ」

私はポケットから袋を取り出す。あの時はこんな事になるなんて少しも思っていなかったので、本当にさっぱりとした普通の袋だった。もう少し飾りつけてもらえば良かったかなと苦笑する。

今更後悔した所でどうしようもない。私はそれを素直に莉子に手渡した。

「これは？」

「莉子にあげようと思って買ってただけど、三年越しになっちゃったわね」

開けてみて？と言えば莉子は少し驚いた様子で恐る恐る手を動かす。中から出てきたのは何の変哲も無いアクセサリーで、でも私が莉子に選んだものに間違いなかった。

「これ……いいんですか？」

莉子の視線が指輪と私を行き来する。きよろきよろする様子が三年前と重なって微笑ましい。

「良いも悪いも莉子に買ったんだもん。遅くなってごめんね」

私が申し訳なさそうにそう言うのと莉子はぶんぶんと頭を横に振って、ぎゅっと指輪を入れていた袋ごと抱きしめた。三年経って同じくらいになった身長は、だけど未だに私の方が高いようで髪の間から覗き見えるその耳は赤くなっていて可愛かった。

「気に入ってくれた？」

「はい。ありがとうございます」

笑うと華が咲くよう、なんて、言える人の正気がしれないと思っていた。だけど、今なら私はその人に共感できる気がする。流石に口に出す事はできないけれど、莉子の笑顔は本当に、華が咲いたように私には感じられた。

それでね、と口に出そうとして何を続けたかったのか分からなくなってしまう。言わなければならないことは、言いたいことは中々な量があつたはずなのに。

きつと、目の前で笑う彼女のせいで色々なことが頭から飛んでしまったのだ。

「そ、れでね。莉子。私が約束したのは、何も知っていたからだけじゃないわよ」

喉に引つ掛かってしまった言葉を蹴り出すように私は喋った。そうしないと何時までも莉子に伝えたいことが伝わらない気がした。

「莉子に、会いたかったから、約束したの」

あの約束は再開の約束だ。

三年という月日が二人を隔ててしまっても、私は莉子に逢いたいと思っていたし、莉子もそう思ってくれたからこそ成された約束だと思っている。

だから私は、私が指切りをした一番の肝心な事は　きつと彼女に会いたかった事なのだ。それをただ私が三年後に戻るからという理由だけにされてしまつては堪らない。

この時の私の感情を形にすればきつとこうなる。

「だから、会えることが重要なんじゃないの。逢いたいって思つて

来てくれたことが私は嬉しい」

口に出してから、あれ、これってかなり恥ずかしいことを言うてるんじゃないかしら、と思ったけれど勢いづいた言葉は途中で止まりはしない。目の前の莉子の顔が赤くなるのを見ながら、きつと自分も同じくらい照れた顔をしているのだろうなと感想を持った。

「……ほんと、あなたは、わたしがびっくりすることばかり、しますね」

「最初に驚かされたのは私よ？だっていきなり泣き出すんだもの」「それはわたしも一緒です。木から落ちてきたんですから」

莉子の言葉にそれもそうかと素直に納得する。

彼女にしてみれば自分は木から落ちてきた人だろうし、その後木から落ちるようになってしまった人である。私だったら絶対夢でも見たかと思って信じない。

「それにしても、本当に良く来てくれたわ。私ってかなり怪しい人なんじゃないかしら」

たとえ鞆が残っていたとしても、それはそれで不気味だし、私は二度とこの場所に来なくなってしまうだろう。だけど莉子はまるで私がここにいることが当たり前のように約束を守ってくれた。それは唐突に消えた人と対した人物の対応ではなくて、丸きり普通の人の約束のようだ。

「鞆がありましたし、何より怪しくても何でも、もう一度会いたかったから」

え、と顔を上げると莉子の顔はさっきより更に真っ赤になってい

た。

私もかなり恥ずかしいことを言っただけだが、これには適わない。恥ずかしいに可愛さが足されたら無敵になるのだと私はこの時に知った。

「考えてみると、わたし、あなたのこと、何も知らないなあと思ってたんです。名前さえ知らなくて」

「そうだったかしら？」

言われてみればそうかもしれない。莉子の名前を聞いたのは慰めてる最中だった為、私が自己紹介をする場面はなくなってしまったのだ。町を回るにしても不便はなかった。

「そうです。だから、せめて、名前くらい知りたいなあって」

名前。確かに、人間関係で最初に交換すべき情報だ。むしろそれを交換していなかったわたし達の方が珍しい。少ない時間とはいえ、ずっと一緒に行動していたのだから。

頬を染める莉子は可愛かったし、彼女の希望も最もである。名前を交換したいなら今すぐにでもする。それとは別に私の中には不満に近いものがくすぶっていた。

「名前だけでいいの？」

私はもっと、色んなこと、色々な莉子を知りたいわ。それに知って欲しい」

不満はすぐに口から飛び出て行った。この堪え性が無い所も友人にはよく注意される。今度から気をつけようと頭の隅で考えていると、目の前で莉子が目を真ん丸くしていた。

「いいん、ですか？」

「良いも何も、その為の約束でしょ」

似たような問答をさっきもしたと思って私は少しおかしくなった。くすりと小さな笑いが口端から零れる。

この子は私と一回会っただけで約束は守ったと離れる気だったのだろうか。少なくとも私は再会できた時間から続きを求める気持ちがあった。離れなければならぬ定めだったのならば、再開する運命を作るだけなのだから。

「そうね。やっぱり、最初は名前にしましょうか」

これからすることは山ほどある。まず連絡先の交換をして、三年前はできなかった街中を巡って歩いて、今度こそゲーセンに行ってプリクラを取るのもいいかもしれない。頭の中で予定を組み立てる私に莉子はふつと笑顔を零して、瞳の端に浮んでいた雫を拭った。

「結局、そこに戻るんですね」

「いいのよ。名前は大切でしょ？ね、莉子」

「そうですね。わたしも、あなたのことを名前で呼びたいです」

私は大きく息を吸った。これが最初の一步、私と莉子の人間関係の始まりなのだから。不思議な出会いをした年下で同い年の彼女との。

「私の名前は」

目の前には大きな月が出ていた。丸くて白い、大きな月が。真昼に顔を出すそれは三年前も、今も、落ちる前も、落ちてからも、同じ顔で浮んでいた。

それに重なるように莉子は涙混じりに、でも微笑んでくれた。

後書き

改めまして、江川なつるです。

真昼の月を読んでくださり、本当にありがとうございます。

そして、わざわざ後書きにまで目を通してくださるなんて、あなたは良い人です！

二次で話を書くことはあってもオリジナルを書くのは初めてだったので色々ばたばたしている箇所もあります。

でも完結しました。

今はその事にほっと胸を撫で下ろしてます。

自分、完結させることが苦手なもので、最後の一話でいつも詰まっています。

最早習性の様なものなのかなと思いつつ、悪癖には変わらないので直したいと望む日々です。

ですが読者さまがいることに感激して、お気に入り登録されていることに狂喜して完結させました。

本当に応援ありがとうございました！この話が完走できたのは読者様のおかげです。

本当はもっと早く投稿できる予定だったのですが、結局年末になつてしまいました。

まだまだ、書きたい話があるので（女の子の話ばかりですが）これからも気が向いたら見てやってください。

では後書きでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7760m/>

真昼の月

2011年3月28日14時57分発行